

鬼師の世界一白地：^{かみせい} 神生鬼瓦
 The World of Ogre -tile Maker -Shiraji: Kamiseionigawara

高原 隆

Takashi Takahara

愛知大学国際コミュニケーション学部

Faculty of International Communication, Aichi University

E-mail: Takashi@vega.aichi-u.ac.jp

現在（2015年）白地の鬼板屋を中心にその実態を調査研究している。鬼英（高原2010）、カネコ鬼瓦（高原2012）、シノダ鬼瓦（高原2013）、石英（高原2014）とすでに四軒の鬼板屋を手作りに特化した白地屋として取り上げ、その特徴を考察してきた。これら四軒の鬼板屋はいわゆる黒（地）の鬼板屋と比べるとその始まりが一世代も、二世代も、場合によっては三世代も遅いのが特徴で、結果、鬼板屋それ自体の歴史が浅くなる。しかし、黒の鬼板屋と同様に、鬼瓦の伝統を次世代からさらに次の世代へとつないでいっているのも事実である。

今回扱う神生鬼瓦は他の白地屋と同様に、黒地の鬼板屋に小僧として入り、年季が明けて職人となり、いくつかの鬼板屋を渡り歩き、鬼板屋として独立した例である。しかし、現時点では残念ながら次世代へ鬼瓦の伝統の継承が行われないことになっている。おそらく他にも神生鬼瓦と同じ道をたどった鬼板屋が何軒もあると思われるが、これからその一つの例として、神生鬼瓦の始まりから今に至る一連の流れをまとめてみたい。

神谷益生

神生鬼瓦を興した神谷益生は昭和16年（1941）11月24日に今の高浜市で生まれている。平成27年現在、益生は誕生日が来ると74歳になる。神生鬼瓦の仕事場で現役として今も鬼瓦を作っている。工場は高浜市の沢渡町にあり、（株）石英で働いている岩月光男、岩月実親子の工場からすぐ近くに位置している。その工場はL字型をした二階建てで、一階は土間になっている。訪れた時、益生は一人で広い工場を歩き来しながら、一つずつ鬼瓦を作っていた。話しをする時も鬼瓦を作りながら話しをするのである。神生鬼瓦をたずねたのはかなり前にさかのぼる。平成12年1月26日が最初の神谷益生との出会いである。そして平成26年10月24日に白地研究をまとめ始めてからまた再度

訪問を始めたのである。実地調査が主体なので、文献調査のようにデータを比較的短期間にまとめることができず、全体像をとらえるのに時間がかかったのである。ただ時間がかかった分、世代交代の様子を実体験を通して知ることができ、研究に深みが出たことは事実である。調査における時間の厚みの重要性を身体で感じている。

白地屋である益生は鬼板屋に生まれたのではない。鬼板屋とはまったく縁もゆかりもない家庭に生を受けている。鬼板屋とつながりのある家に生まれること自体が特殊なのであるが、そうした鬼板屋に生まれた子供は男であると鬼師になるか、鬼板屋を継ぐかして何らかの形で鬼板屋に深く関わるようになることが多い。しかし、鬼板屋とはつながりのない家に生まれる人が大半のこの日本において、職業として鬼師になる道をとることはさらにまれなことと言える。益生は生まれたうちの家業を次のように話してくれた。

うちの親父はねえ、昔、行商なんてたってあったでしょう。何か売りに歩く。そういうふうな仕事が、行…、あの一、仕事だったよう。

「カンカン、カンカン」って、あの一、ブリキで作った缶をね、うん、売りに歩いたよう。自転車に乗せて、うん。

それが神谷光治で、益生の父であった。男4人女1人の兄弟であり、そのうち鬼師になったのは益生一人である。何が理由で鬼とは全く関係のない家の子が鬼師の道を歩むことになったのか興味ある話なので益生に聞いてみた。

ねえ、まあ、近くにそういう、その家が（鬼板屋）あったというだけのことじゃないかなあ。鬼長さんの家、知ってみえるでしょう。あそこから、ほんの一50mくらい南かなあ。

あの一、金の鯨しやちののつとる家だけどねえ。今でも行けば、ちょっと鯨の色があせ、褪せちゃって、黄色い鯨になっちゃってるけど（笑い）。そこの家。50mかそこら。

高浜市自体が日本において特殊な町で、鬼師が住む（棲む）。個々には高浜以外の町でも鬼師は人知れず棲んでいる。しかし、高浜では鬼師が他の町に比べると遙かに多く「住ん」でいる。益生はなんと生まれた家から50m先に、鬼板屋の中では特に由緒ある鬼板屋、鬼長が目と鼻の先に位置する場所で育った。この特殊な環境が益生を鬼師の世界へ誘う人物へと導く。その一つが三代目鬼長となる浅井邦彦との交流であった。

その一、三代目、もう亡くなっちゃったけど…。邦ちゃんがねえ…。あの子がわしと同年だもんで…。ほんで、まあ、あの子も友達。友達と一緒に遊んだりなんかして、仲間だったもんだい。まあ、うん、そんな、そんなことでねえ。切っ掛けはそうだと思うよ。

益生と邦彦は家が近だけでなく、小学校も同じ高浜小学校で、親しい友達だったのである。当然、益生は邦彦の家へ遊びに行くことになり、幼い頃から鬼師の世界をのぞき見ることになる。現在は鬼長の本宅は建て替えられて立派な建物になっており、一方の工場はそこから少し離れた二池町の広い敷地に移っている。鬼長本宅にあった旧工場の面影を残すのは春日英紀ことおにひで鬼英の工場がある建物が鬼長の敷地の一角に存在するのみである。鬼長も鬼英もすでに何度も訪れているので、益生の話を聞きながら益生の物語る世界がリアルに脳裏に立ち上がるのであった。益生が持つ鬼師の世界の原風景である。

おう、鬼英さん(笑い)。

あの人がやっとなところが工場だったもんね。ほいで、今の鬼長さんの本宅のどこ、あそこがみんな工場だったね。工、工場はよそへ変わってねえ。

益生が邦彦と鬼長へ行って遊んでいた頃、鬼長の親方は二代目鬼長の浅井道夫であった。また一代目の浅井長之助もまだ健在であった。益生によると「浅井長之助さんはわしら行った頃は、もう、えらいおじいさんで…」といい、長之助の印象については「さっぱり、さっぱりない」という。また親方であった道夫についても、「あーんまり、覚えはないなあ。子供の頃だもんで…」と話している。つまり、益生は三代目鬼長に将来なる浅井邦彦との交遊を通して、「鬼師の世界」へ足をいつしか踏み入れていったのである。

鬼師の世界へさらに入ることになったのがアルバイトであった。益生は小さい頃から家計を助けるためにいろいろなアルバイトをしていた。その一つがなんと鬼長でのアルバイトで、実際に鬼を作っていたのである。

昔は、小さい頃はアルバイトをしたりなんかしとったわけですよねー。ええ、子供の頃はアルバイトをして、まあ、その、アルバイトが、アルバイトの一つに、この、鬼が入っていたということ…。

小学校の、中ぐらいから、アルバイトやりましたよ。たとえば新聞配達だとか、

新聞売りだとかねー。牛乳を配達だとか。ああいうの、仲間の中でいろいろやりましたけどねえ。その中で、そうですねー。鬼も作ってたってことですよ。うん、今はあまりアルバイトやる子がないけど、その頃はみんながそうやってアルバイトしながら家庭を助けるというのかなあ、うん、そういう事してたもんですよ、うん。

鬼長さん、行ってみえたと思うけど。あすこがうちのすぐ近くなんです。ええ、本宅が近くですから。まあ、そんなことで、あすこで。まだ鬼長さん(浅井長之助)生きて見える頃。だから、今から…もう 40、50 年近く前の話だよ。ねえ。

益生が語っていることはごく普通の人が鬼師になる前の一種の境界のような狭間に当たり、「鬼師の物語」の発生譚とも言えるある意味で異界への参入の有様である。

うーん、結局ねえ、あの、こういう型を、型の中へ土を込んで、鬼を作るっていう、そういう仕事。それから、仕上げやなんかは、やっぱり腕ができてこんと、できんもんですから、うん、あの、ただ作るだけの仕事。うん。

小学生の半ばくらいから、そういうような事してましたよ。ええ。まあ、それが、えー、わしは、まあ、中学卒なんですけども、卒業した時に、まあ、別に自分の行きたいところもなかったし、やりたいこともなかったわけで、それなら、まあ、「このまま鬼を続けようか」というようなことで、この業界に入っちゃったわけですよ。ねえ。

最初はアルバイトとはいえ、鬼長で鬼を作り始め、小学校半ばくらいから中学校を卒業するまで続けている。そして中学校を卒業すると同時に鬼師の世界へ小僧として入ったのである。アルバイトは時間的にはほぼ毎日学校から帰って一時間から二時間、鬼長で鬼を作っていた。

時間は学校から帰ってきてからのほんの一時間か二時間か、それぐらいのもんじゃないの。日曜日はやったのかどうなんか、ちょっと覚え、記憶にないけど。

益生は鬼長でアルバイトをする切っ掛けについても話してくれた。それは友達の本彦がアルバイトの話を持ちかけたわけではなかった。益生の父、神谷光次の仕事仲間であった神谷喜代一の口利きであった。

邦ちゃんとか入る切っ掛けは、うちの親父の、その一緒にカンカン売りに歩いとっ

た人が…。

この一緒にカンカン売りに歩いていた人が神谷喜代一であった。ところが喜代一はただのブリキ缶売りではなかった。鬼師だったのである。戦争中、鬼が売れなくなり、さらに終戦後も暫くそういった状況が続いていた。喜代一は戦争中に兵隊となり、鬼師の仕事からいったん離れたのだ。そして戦後、鬼師の仕事がすぐにはなかったので、カンカン売りをして生活していたのであった。益生の父、光治は偶然にもと鬼師の人と一緒に仕事をしていたのである。

喜代一は戦後暫くして社会が落ち着き、鬼瓦の需要が出始めると、鬼師として他の鬼板屋の職人にはならず、自ら鬼瓦を作る白地屋を立ち上げたのであった。それが山キ鬼瓦である。喜代一は仕事仲間の光治との縁を通して、光治の息子の益男にアルバイト先を紹介したことになる。また益生が15歳になり中学を卒業すると、社会に出るために仕事の斡旋もしている。

うちの親父の、その、一緒にカンカン売りに歩いとった人が、それをやめて…。その人は昔っからの、鬼、鬼の職人さんだってね。うん、ほんだもんで、うちの親父の友達ってのが、同業者かねえ、その人が、あの一、鬼屋を始めてさあ…。んで、あの一、その、福光さん(鬼板屋)とこへ紹介してくれたのかなあ。

つまり、益生はアルバイト先は鬼長であったが、長い間鬼長で働いたにもかかわらず、鬼長へは結局のところ入らなかった。鬼板屋の小僧として入って先は山本福光が経営する鬼板屋であった。現在の山本鬼瓦の前身である。

学校降りた時は、結局そのままやってくんじゃなくて、今度、あの一、小僧としてね。あの頃(1956年)、まんだ小僧っていうことをやってたわけだね。結局、仕事を教えてもらうというような、そういう、みんなそれぞれに小僧、昔は小僧をしてたんだけど…。小僧をやった人から、それから、あの一、そうじゃない、単に最初から、えー、セイブンいうのか、一ついくらかいいうようなやり方でやった人もあるけどねー。うちらの場合は小僧として、ええ。

えー、それは中学の終わりです。うん、そっから始めて三年半。

益生は神谷喜代一の紹介で山本福光の鬼板屋へ小僧として15歳の時に入ったのだ。そして益生は三年半、山本福光のもとで鬼瓦の修業を開始したのである。この山本福光

で益生は本格的に鬼師の技を身につけることになる。

その、福光さんっていううちなんですけど、すぐ隣でね。今の役場(高浜市役所)のすぐ前なんですけど。えー、そこで三年半。小僧として。まあ、そこで仕事を教えてもらって。教えてもらいながら、窯の仕事をやってみたり、土練機をやってみたり…。そう言うようなことで、僕の場合は、そこ、三年半で結局よそへ出ちゃったわけなんですけど、うん。

山本福光の鬼板屋では親方の山本福光からは直接鬼瓦の指導はほとんど受けていない。益生は山本福光について次のように語っている。

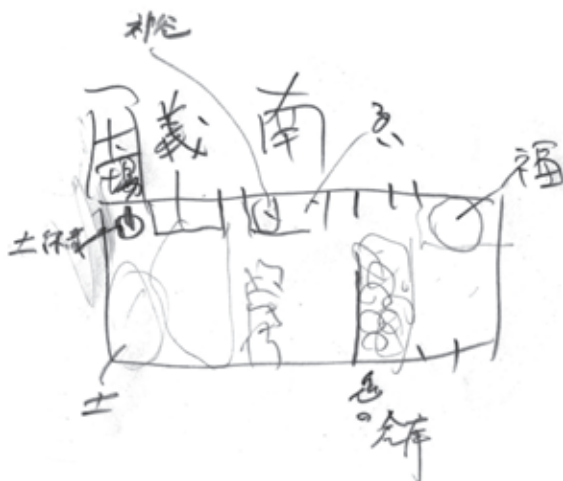
福光さん、親方じゃん。親方ってことは、大将。うーん、福光さん、あつ、あれでも一、少しは作っとらしたなあ。たまには職場入って作っとらしたでねえ。うん、ほだ、全然できん人じゃない。うん、少しはできたと思うよ。

ほだけど、だいたい、その一、親方ってのは自分が売ったりなんかするのが仕事だもんで、そう作っとるのも時間が少ないと思うもんねえ。うん。それと、あの人、あの一、市議員にもでとらしたし、それ、そんなことで、あんまり仕事はやっとる場所は、あんまり見たことないなあ。

親方の福光は仕事場にはあまり出ず、営業や他の仕事を主にしていた。一方、仕事場には職人が三人いて鬼瓦を作っていたのである。つまり山本福光では親方が中心になって鬼瓦を生産していくのではなく、職人を中心に鬼瓦が作られていたのである。そしてその職人の中に腕のよい中心的な職人がいてその人を中心に仕事場が動いていたのである。その中心人物が石川類次であった。益生は実質的にこの類次から鬼瓦を学んだと言える。その頃の仕事場の様子を益生は語ってくれた。工場の配置は現在の神生の仕事場とほぼ同じであった。南向きの窓際に仕事用の台ないしテーブルがまっすぐに並んでいた。益生に「当時の、あの、福光さんと同じような構造になってるんですか、ここは(神生鬼瓦)」とたずねると、一言、「そう」と返事が返ってきた。「うん、南、結局、あの、光が大切だもんで…。うん、北向いてやると…」

えっと、位置はね…。義照君(杉浦義照)は、まあ、あの一、職人だもんで、離れて、これ、^{うち}家があるよねー。

益生は仕事場の当時の様子を簡単に紙に描きながら説明していくのであった。(第1図参照)



第1図 鬼板屋山本福光の仕事場の間取り

こっちが南だよな。うん、ほんで、入り口が、入り口が、この辺とこの辺と、この裏のとこと、この辺に入口があって。ここに、ちょ、ちょっこらした仕切りがあって。ほいで、ここで、福光さんがやる時には、あの一、ここで仕事しとらした。テー、テーブル、ここ、ここだけの、ちっちゃいね。

ほれから、うーん、この入り口だったか、こっちの入り口だったかわからんが、ふーむ、ここに、テーブルがあって、ここ、テーブルがあって、ここが義照君。ほで、ここに土場があって、土場があって、ほで、ここで、土練機。ふん、この砕いた土をこっちへやって、ほいで、義照君の場所がここで、ほいで、ここが類さん。

ほんで、わしがここの隣で、類さんの隣で、うん、教えてもらいながら、やっぱり小僧だもんで、しょっちゅう見てもらわなあかん。うん、こんな絵だと思ったが、配置はね。

そして、それぞれのテーブルの後ろの土間に板を持ってきてその上にできあがった鬼がずらりと並んでいくのである。誰が作った鬼かは一目瞭然である。このように益生がいた仕事場には、師匠の石川類次と職人の杉浦義照、小僧の神谷益生、そして親方の山本福光の四人が仕事をしていたことになる。益生は類次のすぐ側で直接、類次から指導

を受けていた。

うん、ほんで、わしがやるところを見てもらったでねえ。うん、こやって、一つ作ってもらって、作って、「これでどう」って言って聞いて…。

ああ、類さんが「いいよ」って言ったら、そいつはまた持ってって、また次のやつをやっとって、ほで、出来あがったら、「これでどう」って聞いて。

そういうふうなやり方でやっとなね。ダメな場合はその人が(類似)直してくれるじゃん。特にしかられることもなかったなあ。類さん、いい人だったもんで。そんなにしかるとかってそんなことなかったなあ。



第2図 作業中の石川類次(山本福光にて)

ただ叱ることもなかったが、ほめることもなかったと益生はいう。(第2図参照)

あんまりほめてもらえなかったもんな。まあ、だいたいが上手じゃなかったもんなあ。(笑い)ほめてもらうほど上手なことやってへんかったで。

当時、益生は小僧として鬼瓦を作っていたが、他にも週に一回ほどは窯の仕事をしに行き、月に一回は同じ場所で土練機を動かして粘土から鬼板を作っていたのである。

また小僧の賃金についても話してくれた。当時、一日百円だった。小僧のこづかいといっている。月勘定で月末に支払われた。途中から百円から百二十円になったといい、

最後まで百二十円が続いたという。この状態が益生が小僧として山本福光にいた三年半続いたことになる。

一方の石川類次はジョウヨウ（常傭）として仕事をしていたという。常傭とは長期にわたって人を雇うことを指すが、益生は次のようにその仕事について話してくれた。

あの人（石川類次）が、ジョウヨウで仕事しとったねえ。ジョウヨウってことは一日いくらって言う、そういう仕事ねえ、うん。あの方は、やっぱり、えっと、その、…、小僧に仕込むことだとか、ほれから型を作ったりとか、そういう風な仕事が、あの、あの人の仕事だったもんだね。ほで、あの一、特殊なものを作ったりしながらやっとならしたもんだ。（第3図参照）



第3図 牝牛の置物 石川類次作

ジョウヨウとは一日一日で仕事をする人のことであり、別の言葉で言うと、日当で働く人となる。ただしジョウヨウとはただ日当で働くのではなく、仕事場において職人として主だった仕事を任された人を指す。ジョウヨウとは別にもう一つ鬼師の世界で職人がとる仕事にセイブンというのがある。セイブンは益生の説明によると、「これ一つ作っていくらっていう人をセイブンっていう」と言う。益生は言葉を言い換えて次のようにも言っている。「出来高で仕事をしとる人をセイブン」、つまり当時は三つのタイプに鬼師は職種が分けられていたことになる。まず小僧（職人を目指す見習い）、そして小僧を勤め上げて職人の身分になり、セイブンとして働く職人。三番目が、ジョウヨウとなり、仕事場を主に任されている職人。こういった職人たちの上に親方がいて全体を束ね、鬼板屋を経営したのである。

益生は師匠である石川類次の話をしてくれた。益生が現在、鬼板師として活躍できる

のは小僧の時代に山本福光の鬼板屋で類次と三年半、テーブルを共にして鬼瓦を仕込まれたことが大きい。

類さんはねえ、いい人だったけどなあ。ほで、若い頃はねえ、あ、あの人はそこらじゅうまわったつって。日本中つてのか…。

昔は、あの、瓦屋さんでね、鬼つてのは、鬼屋さんつてのは、あんまり、あの、他にはなくて…。この、三河には鬼屋さんつていうのはあったんだけど…。他、あの、三州の他の、瓦作ったとこねえ…、そういうとこは、瓦屋さんが、瓦屋さんの器用な人が鬼を作ったりしとったもんで…。

ほで、あの、瓦屋さん自体が鬼作ってるもんだ。もう、世界、世界中じゃない、日本中どこ行っても、そういう鬼を作る仕事があったみたいねえ。ほいで、類さんつて人はそういう仕事、あの、全国回って仕事しとったみたい、そういう話を聞いたことがあったけどねえ。

こういった仕事をする鬼師をバンクモノ（晩苦者）と三州ではいう。（高原 2010）いわゆる旅職人を指す。類次は若い頃、バンクモノとして鬼板の技を磨きながら実力がものを言う世界で生き抜いてきたのである。類次はバンクモノを通して培った鬼師としての実力もさることながら、さらに重要なことは、鬼師になる次の世代を担う人材の養成に貢献していることがあげられる。石川類次を師とする鬼師は少なくとも三人いる。福井謙一、杉浦義照、そして神谷益生である。益生が小僧として福光に入った頃にはすでに福井謙一はいなかったという。

まあ、福井さんは、わし、だいぶ上だもんだ。わしの、あの、入った頃は、もう、福井さんはおいでんかったけどね。うん、義照君が、えーっと、あの、職に上がってじきぐらいだと思うよ。職人になってね。

当時の福光には類次たちが働いていた工場の他にもう一つ、「東の工場」という少し東の方へ離れたところに別の棟の工場があったという。そこには職人が三人いて、一人が益生と一緒に土練機で粘土を作ったり、窯の仕事を専門にしており、あと二人が鬼瓦を専門に作る職人であった。益生たちがいた工場は別棟の工場のように特に名前は付いていなかった。東の工場に働いていた職人は年配の人たちで構成されていた。それゆえ、後に鬼師として成長していったのは類次が育てた若い世代からなる福井謙一、杉浦義照、

神谷益生の三人だったのだ。類次は他の職人が出来ない特殊な鬼瓦の注文が来た時は自らがその鬼を作っていた。

うん、他の人ができんようなことをあの人がやっておいたよお。

山本福光における石川類次の貢献度はきわめて大きい。類次は福光において重要な職人であったことは異論の余地がない。さらに三人の鬼師を同じ仕事場で小僧から育て上げたことは、福光という一つの鬼板屋を超えて、地域の経済、文化、伝統への多大なる貢献と言っても言い過ぎではない。また一人の鬼師が一生の間に作る鬼瓦の多さとその広がり具合は日本中ということができ、そして鬼瓦の耐久性の高さを百年から長ければさらに二、三百年以上にも続くことを考える時、その貢献は単に地域の領域に収まらず日本文化への貢献と言っても差し支えない。

なぜ類次のもとから多くの鬼師が巣立っていったのかについて益生にたずねてみた。個々人の才能があったことも大きな要因なのではないかという興味ある答えが返ってきた。

うん…。

どっちかって言えば、そっちかも知れん。うん。いわゆる才能があったんじゃない。うん。そうだね。やってみてあかん人は、もう、やめってっちゃうもん。うん。

才能か環境かはすぐには白黒つけがたいが、この微妙なバランスのもとに鬼師が育つのは確かである。いくら才能があっても、適切な環境がないと鬼師にはなれないことも事実だからである。

何か類次から福光で小僧をしていた頃に言われたことを話してほしいという次のように答えてくれた。

職人になって、まあ、すぐに、そこはやめちゃったけどねえ。わしのほうはねえ。

何にもない。何にもない。へへへへ。(笑い)

あっ、あるある。「はござく」。うん。わしが、だいたい手がのろかったもんだ、「もっと早く」って事はよく言われたねえ。

うん、「上手に作れ」とは言われなかったなあ。わしらも早く作るなんか、いつでも出来ると思っつたもんで…。そうだねえ、そういうことはあったねえ。

益生に類次が言った言葉「はござく」は職人の特徴をよく表しているのかも知れない。上手に作る前に来るものは「早く作る」ということになる。「はござく」は職人の心と言える。上手はその後に付いてくるものなのである。

益生は三年半で年季を明け、職人になると、すぐに山本福光のもとを去った。そして山キ鬼瓦、つまり益生が二度世話になった神谷喜代一が経営する鬼板屋に移ったのである。

そこのうちが、うちのじき近くだもんだ、そこへ変わっただねえ。

何か特に理由があつて替^かわつたのかと再度たずねてみた。

あー、なんだったかなー。近いで、近いでと、その、おいさん自体（神谷喜代一）をよく知とつたってことなのかなあ。誘われたのかなー、行つただで。よう覚えがない。

山キ鬼瓦での仕事はどうだったのかと聞いたところ次のように益生は言うのであつた。

そっから職人で始まっとうだねえ。うん、ほだもんで、それから、もう、今まで言われとつたみたいに、数作らにゃ金にならんもんだあ。職人は、もう、一日いくらじゃないもんねえ。一ついくらだもんねえ。

高原： あっ、じゃあ、セイブンってこと。

神谷： セイブン、うん、そう。セイブンになれば、もう、そこには一日おつたって、一つも作らにゃ、金にはなりゃへんもんだ。うん。ほだもんだ、一生懸命作つたよ。それで、まあ、早くやることは、そで、覚えとるけどねえ。

山キ鬼瓦は入つた時、益生が初めての職人で一人だけであり、親方の神谷喜代一と二人で鬼瓦を作つていったのである。あと、アルバイトが入つたという。

わしが初めてだもんで。今まで一人でやっておいた。うん、あとは、あの一、学生の、やっぱり、アルバイトだわ。うん、使ったのは。わしが、その、鬼長さん行った、そうゆうようなアルバイトの子がおったけどねえ。それも知り合いの子。わしの友達とかさあ、親戚だとか。いい気なひとならやりこいとかつつて、うん、やらしたぐらいの、それぐらいのもんだもんね。職人はわしだけ。あと、親方、親方兼作る人だねえ。

山キ鬼瓦で何を学んだのかとたずねると予想に反していい返事は返ってこなかった。

ふん。何も学んでないなあ。うん。そこは大したもん作らんかったもんね。ほんとに大したもん作らんかった。型で、ポンポコ、ポンポコ、作っていくような、そうゆう、そうゆうふうな仕事のうちだったもんね。うん。だもんで、今みたいにこういった手で作るものはほんとになかったねえ。

益生は福光で18、19歳の頃、職人になり、すぐに山キ鬼瓦へ移り、4年ほど職人として働き、23歳の頃、山キ鬼瓦をやめている。山キ鬼瓦を出たあと、次に別の鬼板屋に入ったかというところではなかった。約半年ほど鬼師とは全く違う職に就いていた。

ほんの半年だよ。半年だよ。不動産の会社。(笑い)何ででも、なんでもないなあ。新聞の広告に不動産の会社が募集しとったもんで、行ってみて、うん。

うーん。まあ、あの、やっぱり、遠かった。一番いかなあ、遠かったねえ。名古屋までっていうのがねえ。うーん。名古屋の今池まで行っったもんね。

うーん。ほで、あの時に不動産の試験があったんだけど、その試験を、あの一、受けたら滑っちゃってさあー。(笑い)ほで、もうやめる気になっちゃただな。あれでもし、通っ、通っつたら、不動産のほうへ、やっつたかも知れんねえ。

うん、それと、やっぱり遠いもんだ。もう、えらいだよねえ、通勤が。うん、片道一時間半。往復三時間。きついよー。ほいで、あんた、やっぱり一、えらいもんだあ、朝でも夜でも座りたいじゃん。ほなもんだ、朝でも、あの一、普通の時間に行くと超満員で座れへんもんだ。一番電車乗ってねえ。(笑い)ほで、名鉄の普通電車で名古屋まで行ってねえ。(笑い) そんなことやっつたもんで、うん。だで、ほで、夜帰るにはやっぱり、あそこ、麻雀やっつたもんで、麻雀誘われて、最終電車も

うぎりぎりなんて位まで麻雀やって、ほで、また帰ってくる。また一番で出て行く。(笑い) そのうち嫌気がさして来ちゃったのかな。うん、さすがにねえ。(笑い) 名古屋までえらいわあ。

益生は鬼師以外の仕事を半年ながらも体験して、また鬼師の世界へ舞い戻ってきたのである。三番目に入った鬼板屋が下鬼栄であった。下鬼栄は山本鬼瓦の系列である。(高原 2006) 山本福光は当然のことながら山本鬼瓦の一族であり、初代山本鬼瓦に当たる山本佐市(1878 - 1961)の次男であり、実質上、山本鬼瓦の二代目と言っていい人物である。(高原 2005) その山本福光のもとで職人になった神谷益生は鬼師としては山本鬼瓦の系列に入る。それゆえ、益生が不動産会社を辞めて、下鬼栄に職人として入ったことは鬼の流儀からも系列からも合致している。しかし、益生自身はその事は意識しておらず、いきなり下鬼栄へ行って働くことになったのである。その当時、益生は23歳か24歳になっており、それから下鬼栄に職人としておよそ10年いたのである。益生はこの下鬼栄で本当の鬼師としての修業を積んだと語っている。

鬼栄さん行くようになってから、その頃に、別にどこ行ってもいいと思っていったんだけど、そこのうちは、もう、何でも、つく、作らしてくれるってのか…。

あの一、伝票に来るもんだ。

伝票に、次何やろうったって、伝票が来るもんだ。それ、いくら焼いても(笑い)、焼いても作らないかんじゃん。(笑い) 職人としてはねえ。そうすると、もう、わからんと、隣にやっぱりおいでた職人さんに聞いたりしながら、やってたもんね。ほで、結局仕事をそこで一番よく覚えたね。

まあ、その、鬼屋の方、しょく、職人さん、たーんとおいでたけどお。ほで、その職人さん、みんなが、みんな、いろいろかの仕事やっておいたもんだ。ほだで、みんな上手じゃなかったのかなあ。うん。ほで、わしにも、えー、素人だからつつって、あの一、別に簡単なもんばっかじゃない。難しいもんも、何でもやらしてもらったもんだ。うん、多かったねえ。

益生は次に1964年頃から10年ほどいた下鬼栄の様子を話してくれた。当時の下鬼栄の仕事場が浮かび上がってくる語りになっている。できる限り益生の言葉で伝える。

当時はねえ、裏に、裏に夫婦のひとと、夫婦のひとと、一人もんのひとで、裏に三人。

あそこは(下鬼栄)何軒でもあったよ。本宅のほうは仕事場になってたし、土練機場、ほれから道の東の方が、うん、道を隔てて南っ側に、一軒、真ん中に窯があって、その後ろにまた一軒あったもんだ。うん。三つの場(仕事場)、三つ。ほれからその真ん中に窯があって、うん、今でも窯は同じところにあるもんだねえ。

うん。ほいで、裏のほうにその三人がいて、わ、わしは南の方の一番東におったもんだ。その隣に夫婦のひとがおいでて、その隣にわしと同年の子が一人おったけど、まあ、その子は、あの一、やったりやらんだったりというような子だったもんだ。まあ、いちおう、その子の、えーと、工場あるんだ、三人、三人は三人、六人おいでたのかな、職人が。

ほで、あとはやっぱり、窯焚きをやるようなひとが一人おいでたもんねえ。窯と土練機をやるひとが…。あの頃、うん、鬼栄さんは多かったよ。すごい多かったよ。

山本福光では益生の隣には石川類次が常におり、事実上の師匠になっていた。下鬼栄でも同様のことが起きたのである。実際に益生は下鬼栄時代に鬼瓦の技をさらに学び本当に修業になったと言っている。山キ鬼瓦の時と逆のことを話している。そして実質上、益生の師匠になったのが隣で働いていた職人の神谷正行であった。

その隣の人、普通の職人さんだもんだ。ほでも、やっぱり一緒に仕事をしとって、あの、あれでしょ、あの一、わからんところがあれば、聞けば教えてくれるでしょう。(笑い)

まあ一、教えてくれん人もあるかもしれんけどさあ…。ほりゃ、近いもん。

正行さんと奥さんとね、二人で。年齢的にゃー、ま、えらい、あの頃、あの頃もうだいぶ離れつったな。うん、(益生が)二十代の頃に、五十代…。ほだ、正行さんが、どこで、どうやってらしたかは、今までの、ねえ、どこでやっとならしたかってことも全然わからんし、その時に鬼栄におったっていうことしか知らんもんだ。どこに、どこでやっとならしたって事も聞いたこともないしね。

うん、腕のいい職人さん。うん、まあ、だいたい職人さんって言うのは腕がよくな

けりゃ、ふん、やれへんだもんで。

ほで、腕の悪い人が一人ずつおるもんだで、そういう人が窯番になったりね、うん、土練機やったりね。あー、おもしろかったなあ、そういう人がどこにも一人ずつおったねえ。福光さんはほんとにやれんような人が一人おったし…。

ただ益生もすでに職人なので、いわゆる師匠と小僧の関係とは違った形のものであった。益生が困った時に正行に聞くと、的確に教えてくれたのである。

うーん。教えてもらっ、わからんとか聞いたぐらいのことで、うん。ただ、あの、こういうことがわからんつつと、そいわ、あの一、これこれしかじかでってて、いうような教え方しとった…。

その時は(わからない時)、その時はその時で、あの一、口で聞いたことは口で、あの一、ん、何だ、仕事でわからんようなことは、仕事でやっとなる時だったら、あの、^{へら}篋で教えてくれたこともあったかも知れん。ちょっと覚えがないけどねえ。

十年一緒だったねえ。…わしがそこやめるまで一緒だったねえ。

益生が下鬼栄に入って十年間、同じ仕事場で直接鬼について学んだ職人が神谷正行であった。ただ石川類似の時のように隣同士に並んで仕事をしたのではなかった。



第4図 神谷正行(左)、神谷フデ(右)(昭和59年4月22日)

うん、隣っていても、この人はあれだもんねえ。あの一、仕切られちゃって、まるっきり隔離されとったもんだねえ。もう、ドアがあって、その向こうにおいでたという…。うん、分かれてった。うん、同じ建物だけど。

つまり、神谷正行夫婦は隣の扉と壁によって仕切られた部屋で益生たちとは独立して鬼を作っていたのである。そしてドアを通して互いに行き来していたのだ。益生はわからないことがあると正行のところへ行ってたずねていたのである。そして正行の教えはいつも的を射ていたのであった。(第4,5図参照) それは益生の言葉によく表れている。

うん、的確に教えてくれたと思うよ。

正行以外の他の職人とのつきあいはあったのかとたずねてみた。益生の話だと下鬼栄は多くの腕のよい職人が働いていたからである。



第5図 ビン付一文字 神谷正行作

全然なかったね。うん。何か教えてもらうとかそういうことは更々なかったねえ。うん、その人が別に嫌いなわけでもないけどね。

このように益生は山本福光の時の石川類似、そして下鬼栄の神谷正行と二人の腕のよい職人と同じ屋根の下で仕事をするという幸運に恵まれて鬼瓦の技を磨いていったのである。下鬼栄では10年の長きにわたって職人として働いていたが、最終的には益生は独立の道を選んだ。しかもいきなり下鬼栄をやめたわけではない。準備を着々と進めて

いた。

うん、もう、その時に、この工場作っとったもん。鬼栄さんにおりながら。独立する前の何年か前から。「もうやめさしてもらうで」、「自分でやるで」ってことで。

うん。ほで一、工場が出来、出来て、ここが。やるまでのことは、あの一、行くともないもんだあ。ほいだもんだ、鬼栄さんで働かしてもらって。うん。ほいだもんだ、鬼栄さんやめた時にはすぐにこの工場へ来たってということだねえ。

うん、お蔭さんでこの土地を親父たちが買っといってくれたもんですから、場所的には困らなかった。あとはそこにうちを建てれば良いという。うん。出たくても場所がないという人もあるもんね。やっぱり、ある程度の工場がないとこれもやっていけないもんですから。うん、お蔭さん。これがあったからそこへ工場を建てれば良いという簡単なことからやれたじゃないかな。うん。その頃、鬼の需要も注文が多くて盛んでねえ。工場作ってるうちに、「うちにも入れてくれないかなあ」というような話しも出てきたぐらい。うん、忙しかった頃だったもんでね。

なぜ独立した鬼板屋になろうとしたのか気になったので益生にたずねてみた。何らかの強い動機がないとそのまま職人として生活は出来るからである。もちろん職人として一人でやっていける腕がないことには独立はもとより考えられないのだが。

そうですね。ひととおりに出来ると言うことになる、始めてから10年ぐらいかかったでしょう。うん、一番はじめの学校おりてから(鬼板屋)は行ってから10年ぐらいは経たんとぼちぼちのものは出来んじゃないんですか。

うん。独立した時は子供が生まれました。えー、あの時は「一生職人でもいかん」という気になったのかなあ。(家庭があるから)じゃあなくて、やっぱり、うーん、「一往何でもいいで、^{かしら}頭になってみたいなあ、小さくてもいいで頭になって」、うちの親父の台詞なんですよね。これが昔からの「鯨のしっぽより、鯛の頭になれよ」って言うようなことをよく言ってたと思います。それを実行したということですかね、えー。

父親とは相談していないと言う。自ら決心して実行に移したのであった。長年の夢が叶う様々な条件が整っていたのを益生ははっきり認識していたのである。また働いてい

た下鬼栄の親方、初代鬼栄の神谷栄一にもしっかりした了承を得ていた。

あの、知って見るとおり、あの、鬼栄さんの方も、いい方だもんで、「自分でやりたい」と言ったら、あの、「自分でやるならいいよ」って言ってくれてね。「よそへ回るならいかんけど」。そうは言われたんですけどね、うん。「自分でやるならしよがないで、ほんじゃあ、やりなさい」って言われたもんでね。やっぱり大事な職人さんが出て行っちゃうっていうことになると大変な事だもんでね。

独立となると自分の新しい鬼板屋の命名である。益生は屋号を「^{かみせい}神生鬼瓦」と名付けた。命名について益生は次のように言っている。

結局ね、名前のつけようがない。高浜、「神谷」が多いんですよ。「かみ…」何て言ったら「神谷」ばっかで、わからなくなっちゃうもんな。神様の神に自分の名前の一つ、ホンじゃとろうかなと思った場合に、この「^{ます}益」がどうもあんまり好きじゃあなかったもんだ。この後ろのほうをとってね、「^{ますお}益生」の「生」をとって…、「^{かみます}神益」か、「^{かみお}神生」かに、そうしようかなと…。

いろいろ考えた末、「生」を当てることにして、読みづらい方はやめて、もっと読みやすいと思われる「せい」をとり、「神生」が生まれることになったという。

本当に名前なんてのは簡単な、誰が読んでもわかるような名前のほうが得だね。うん。未だに電話がかかってきても間違えて言う人があるもんで…。うーん、「かみおさん」とかさ。あっ、「かみしょうさん」とか言って言われるんですよ。

益生は33、4歳の頃晴れて独立し、神生鬼瓦を興したのである。1975年頃の出来事である。仕事のほうは順調で、特に営業に出ることもなく注文が来るようになっていったのであった。

うーん。成長期というのかなあ。忙しい時だったもんだん。ただ仕事をしていれば電話がかかってきたというような。うん。自分で売りに歩いたという記憶もないし、えー、うん、二、三日前に行かれた鬼十さんでも来てもらえて買ってもらえるようになって、うん、仕事をしてると、あの、「こう言うようなもの、作ってもらえんかな」って来たりねえ、したもんですから。うちはそういった販路拡張、自分でしたとか、そう言うようなことはあんまりなかったですね。うん、お蔭さんで、うん、

何とかこれで一生暮らせますわ。

益生は山本福光、山キ鬼瓦、下鬼栄と約 17、8 年近く他の鬼板屋で働きながら技術を磨いてきたのだが、自分で鬼板屋を始めてからが本当の修業になったと語るのであった。

自分で始めてからが一番修業だったもんねえ。うん、もう、自分で始めてるもん、何でも作らにゃいかんでしょ、来るものは。

自分でやり出すと、もう何が来てもやらにゃいかんもんね。そうすると、今度、もう自分でやるとれば、他に隣でやるとる人もあらへんもんだに、聞くわけにもいけへんもんだにね。もう、あとは、ほら、自分で一、考えてやるしかしようがないわ。こいで、何でもやれるようになったかなあ。そこで何でもやれん人は、まあ、ほうちゃうわけだなあ。続かなくなっちゃうねえ。(第 6 図参照)



第 6 図 経ノ巻尺八寸を製作中の神谷益生 (平成 26 年 10 月 24 日撮影)

独立のための重要な要素は、まず自ら何でも注文をこなすだけの技術が必要となり、日々の仕事が同時に、自らの腕を上げていったのである。益生はもう一つ重要な独立の要素を語っている。それが顧客の存在である。

もう一番の、独立になるのに一番のネックはやっぱりお客さんだった。うーん、お客さんが…、売れにゃしようがないもんで。「売れるのかな」って言うのがね、一番のネックだったね。

ほども、おっ、お互い、あー、お互い、お互いじゃないわ、お蔭さんとねえ、あのー、やり出したらみんなが覗いてくれてねえ。どんどん買ってくれたもんだよ。うん、ほんなもんで意外と順調だったと思う。うん、「もうやめにゃいかん」って言うそんなこともなかったしねえ。(第7図参照)



第7図 古代若葉一文字一尺 多賀大社 (平成24年神谷益生作)

「お客」、「お客」と益生は何度も言うのであるが、なじみ深い言葉だけに、この世界とは縁のないものにはなかなかぴんとこない言葉なのが「お客」なのでたずねてみた。

今は、どう、同業者の人が多いけど、その頃は、あの、瓦屋さん。瓦屋さんであったり、そのー、同業者、まあ、同業者、…瓦屋さんが一番多かったかなあ。うん、その頃みんな個々にお客さん持ってたもんだねえ。今は、もう、大きいところが瓦屋さんのお得意さん。うん、なっちゃって、わしらの、その人たちの、なんだ、下請けみたいな、そういう感じ。今はね。

時代が下るにつれて瓦屋さんがそれ自体が統合されていって、大きな瓦屋になっていったのである。昔は規模の小さな瓦屋さんがたくさん存在したのである。

そう言うことだねえ。うん。(小さい瓦屋さんが)いっぱいあった。うん。いっぱいあったもんだ。それぞれにみんないろいろかの瓦屋さんが入ってねえ、うん、仕事があったんだけど。瓦屋さんが大きくなっちゃって、大きくなればそこに入っとる

鬼屋さんも、そう余計は入れへんもんで…、うーん、ほで、そこへ入った人が、まっ、自分で出来にゃ、うちへ頼むっという、うん、そういう感じになってきたもんで。ほだもんだ、まあ、うちらでも何てのかなあ、同業者の下請けってのが、今はそういうの、そういう仕事が一番多い。

つまり、元請けの鬼板屋が存在し、大きくなった瓦屋と直に繋がっており、自分のところで注文に対処できない場合は他の同業者である鬼板屋へ下請けに出すのである。そして注文次第によってはそのさらに下請けへと続くことになる。すると下請けのそのまた下請けである鬼板屋は注文を選ぶ余地はなくなってくる。

作れた、作れんっ言うよりも、作らにゃしようがなかったと…。そう、何でも作らにゃ仕事がなくなっちゃうもん。うん、そうだね。

益生は一人で勤考して作っていくのである。が、ただ一つ頼れる、相談できる相手があるという。それがなんと、「お客」なのであった。この場合のお客は同業者ではなく、瓦屋でも無く、その注文をくれた大元のおおもと^{おおもと}の本人を指す。

うん。あと、相談するだったら、その、あの一、お客さん、頼む人、お客さん。あの一、たとえば、うーん、鶴なら鶴でどういう格好をした鶴がいいだとか。うん、そんな



第8図 金焼鯉2尺5寸 神生鬼瓦自宅の棟（昭和50年神谷益生作）

感じのものがいいんだとあって、そういう相談は、ね、頼んだ人に相談はあるけど、それから先は自分で、その一、形を考えて作っていかんと……。で、ようは、喜んでもらわにゃいかんの、一番は。そのためには相手の要望を聞いて、沿うようなものを作り上げていく。その繰り返し。うん。

他の人が作った鬼を見て回ることはあまりないという。しかし、自分で作ったのを見に行くことはたまにあるという。(第8図参照)

作るのが一番の勉強だもんだ。まあ、うちら作って勉強だね。

まとめ

神生鬼瓦に至る神谷益生の生きた道程^{みちのり}を追った。鬼師の世界からは縁がない家庭に生まれたいわゆる一般人が鬼師へと成長し、独立して鬼板屋を興していった生き様である。ただ鬼師の世界とはいくら縁がないとはいえ、高浜の地に生まれたこと、そして自宅から50メートルほどの先に鬼師の世界においては由緒ある鬼板屋の鬼長が有り、しかもその鬼長の跡取りになる三代目鬼長の浅井邦彦とは同年で同じ高浜小学校の親しい友達であった。さらには父、神谷光治は鬼師の世界とは縁のないブリキ缶売りであったが、同じブリキ缶売り仲間がもともと鬼師であったという不思議な縁に取り囲まれて育っている。ただし、同じような環境にあった他の益生の兄弟(男4人、女1人)の中で鬼師になったのは益生一人であり、別の要因があることも事実である。

益生は小学生4、5年頃からすでに鬼長で鬼を作るアルバイトを始めており、以来現在に至るまで手作りの鬼師の道をひたすら歩んできている。しかも鬼師になる道程で良い師匠に二度にわたって出会っている。山本福光の鬼師であった石川類次と下鬼栄の職人になった時に同じ仕事場で働くことになった神谷正行である。この二人の出会いは益生が思う以上に益生の人生に多大なる影響を及ぼしていると思われる。

益生が手作り鬼瓦から軌道を外れかけたことは二回ある。一つが山キ鬼瓦を23歳頃にやめて不動産会社に勤めた時である。半年でもどってきている。もう一つが益生が鬼師として独立し、神生鬼瓦を始めて5年ほどの時である。プレス機械を導入したのだ。これもやはり半年ほどでやめている。

物によってはプレスで作ったことがあったんですけど、結局、人を増やせば良かったんですけど、まあ、増やさなくて、自分であっちやったり、こっちやったり、いろいろかの仕事を……。結局、それだから手が回らなかったということで。

このように二度ほど道草をしているが、ほぼ10歳頃から現在(74歳)まで鬼師の道を着実に歩んできたのが益生である。益生の生き様は鬼師という伝統がいかに受け継がれていくかの具体的な例をリアルに示していると言える。

参考文献

- 高原 隆 2005年 「鬼師の世界—黒地：山本鬼瓦系(1)—」 『文明21』 第15号：183 - 208
- 高原 隆 2006年 「鬼師の世界—黒地：山本鬼瓦系(2)—」 『文明21』 第16号：93 - 116
- 高原 隆 2010年 『鬼板師 日本の景観を創る人々』 あるむ
- 高原 隆 2010年 「鬼師の世界—白地：鬼英—」 『文明21』 第25号：53 - 75
- 高原 隆 2012年 「鬼師の世界—白地：カネコ鬼瓦—」 『愛知大学総合郷土研究所紀要』 第57号：1 - 21
- 高原 隆 2013年 「鬼師の世界—白地：シノダ鬼瓦—」 『愛知大学総合郷土研究所紀要』 第58号：1 - 21